黒幕

黒猫麗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界一平和で、自然豊かな日ノ島。

そんな島に、とある五月――殺人鬼と呼ばれる犯罪者が現れる。

それから一年――――警察のもとに届いた一枚の手紙で、闇へと巻き込まれる若者達。

謎と謎が絡み合う　アクションミステリー小説。

目次

第1話 …… 1

第1話

序章――――事の始まり――――

夜。

雲ひとつない、静かな空。

何処からか、狼の鳴き声が聞こえてくる様な、恐ろしい程青白い　満月。

此処、日ノ島で　一際目立つ山。　寂静山――――その麓。

道の直ぐ側の林の陰。男、一人。

その男、黒いマントに身を伏せて深くフードを被り、まるで木の影の様に、身じろぎひとつしない。

この男を、ひとまず『彼』と呼ぶ事にしよう。

其処へ、揚々と七人の若い男女が歩いて来た。

彼が隠れているとも知らずに。

「あ～あ、今は涼しいけど、後一月経ったらじめじめするから嫌だねぇ…」

「桜も散ってしまいましたしね…でも今年は綺麗だったわ。」

「僕達、日ノ島の人達だけだよ、桜を存分に楽しめるのは。近くにある都島の人の中で

は、桜の名も知らない人がいるんじゃないかなぁ？」
「まさかぁ～」
歩きながら、談笑している。
すると、身じろぎひとつしなかった彼が動く。懐から、黒く長細い物を素早く取り出した。それは、鞘に収められている短刀。
彼は、鞘から刀を静かに抜いた。金属製の鞘と刀が擦れ　〝シュッ〟と音が微かにする。
今、七人の人達が彼を通り過ぎようとしていた。
突然、彼は行動に出た。
誰にも気付かれぬ様、足音を立てず、通り過ぎた人達のうしろにまわる。
手元の刀が、月明かりに照らされ　鈍い光を放つ。
七人は、まだ彼の存在を知らない。
彼は、最後尾にいる男のうなじに刃先を向け、
男が驚く間も無く、斬り裂いた。
そして、続けざまに一人、二人と致命傷を負わせる。
三十秒もたたずに、最後の一人をも斬り裂く。
斬り裂かれた人達は、深くフードに隠れて見えなかった、彼の目を見て背筋が凍る。

その目は、まるで自分の心を見透かされている様な、深く　暗く　青い目をしていたのだ。
用事を終えた彼は、血だらけの短刀を懐に戻してあった鞘に収めて　山の中へと消えていった。

――――――五月の出来事である

日ノ島――――其処は、世界一とも言われる程の、平和な島だ。それと同時に、自然がとても豊かな島でも有り、電気もガスも通らない田舎な島でも有る。
村では、自然を生かした木造の建物が並び、落ち着いた雰囲気を漂わせている。
春には、山も並木も地面も、桜色に染まり、
夏には、青々と茂る木々、色鮮やかに咲いた花が顔を見せる。
秋には、何処もかしこも　色とりどりの葉が落ちていて、
冬には、一面銀世界で　雪の積もった地面には、兎や猫、鹿などの足跡が続いているのだ。
そんな島に、一年前の五月――――突如現れた、殺人鬼。
それ以来、満月の有る日の夜になると、再び姿を現しては　人のうなじを斬り裂きまた何処かへ消える、と云う前代未聞の事件が多数起きた。

それから一年。
警察署に届いたある一枚の手紙で、闇の世界へと巻き込まれる若者達。
だが、この話は氷山の一角にすぎない。
――――その闇にまだ光が差し込んでいた頃の話だ――――